

花鳥餘情

八



才廿二

夕旁
師法

才廿三

幻
雲隱

才廿四

白吾郭
竹河

紅梅

石曜文庫

酒湖山庫

僧正慈海

ねるねのふりふり

ねるねのふりふり

ふりふりふりふり

ふりふりふりふり

ふりふりふり

ふりふりふりふり

ふりふりふりふり

ふりふりふり

ふりふりふりふり

ふりふりふりふり

ふりふりふりふり

ふりふりふりふり

ふりふりふりふり

小石記之寛仁二年十月廿五日被奉寄書

下郷之事て定申し栗栖野小野二郷上下

社司各申但昨日下社司久清進解文可尋旧記

皇神初天降信小野郷大原神落山せし亦

栗栖野可為下社司領之令作

官符仍件小野并栗栖野可為下社領之令作

淨土山落し記文て進申し處申す

康保貳年祢直宅焼亡次焼夫者又令作書所

傳不無之記文如件解文并事類又上下社司申

旨亦初被奉神封於上下社司取上下社司

下社司又社司教有増減上下社司七十余戸

下社司五十余戸は同一奉一定文除神山採茶

山々外山者不可奉寧郷被奉寧郷伊勢之祓
官郷郡格之官物舎之類又右近馬場氷室塩河
美子呂池不可奉寧郷之件案内先いたし弁
往賴令申前大府之知給之事也仍請應分
經相來陣座傳前大府命之下社日進申文之所
知又右進的記但至栗栖郷有採下社者之下
社分可有便宜至小野郷之方上之社分至下之
可奉寧非官物官舎之類也

可奉寧賀部上下社郷之事
上社 賀部郷 小野郷 大野郷 錦部郷
下社 栗栖郷 栗栖郷 上栗栖郷 出雲郷
と栗山郷栗山郷那小野郷上栗栖郷栗栖

野郷上下社順之寛仁三年十一月廿六日陳定
あり官符とあらわねけの候し
のほろろとていけあふ令洛那
みと小野栗栖郷ありとていけあふ令洛那
ありとていけあふ令洛那
ありとていけあふ令洛那

下社郷上下社順之寛仁三年十一月廿六日陳定
あり官符とあらわねけの候し
のほろろとていけあふ令洛那
みと小野栗栖郷ありとていけあふ令洛那
ありとていけあふ令洛那
ありとていけあふ令洛那

あいな人ふいふとわらう かみよはる

かんくあきまるとちよ斗流

中島前ふむ事一わらうめとわらう

きんとあつる

あふふとわらう あふふとわらう

こふふとわ

かんりあもあう 九次目あし出し

事候し見 故日計之 辰丑二戌三未四卯五子六酉七午八寅九亥十申十一

日とあふふとわらう あふふとわらう

うたふふとわらう あふふとわらう

と案は島前ふむ事一わらう あふふとわらう

と案は島前ふむ事一わらう あふふとわらう

あふふとわらう あふふとわらう

あふふとわらう あふふとわらう

移の鞍ふふとわらう あふふとわらう

あふふとわらう

院よりあふふとわらう あふふとわらう

あふふとわらう あふふとわらう

院は朱雀院に あふふとわらう

あふふとわらう あふふとわらう

こふふとわらう あふふとわらう

ク務乃事といふなり

おのゝなるゝぬれゝむゝゝおんもゝゝ後ゝ
一々

政令所より將乃清事一ぬゝゝおんも
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おのゝなるゝぬれゝむゝゝおんもゝゝ後ゝ
おのゝなるゝぬれゝむゝゝおんもゝゝ後ゝ
おのゝなるゝぬれゝむゝゝおんもゝゝ後ゝ

おのゝなるゝぬれゝむゝゝおんもゝゝ後ゝ
おのゝなるゝぬれゝむゝゝおんもゝゝ後ゝ
おのゝなるゝぬれゝむゝゝおんもゝゝ後ゝ

おのゝなるゝぬれゝむゝゝおんもゝゝ後ゝ
おのゝなるゝぬれゝむゝゝおんもゝゝ後ゝ
おのゝなるゝぬれゝむゝゝおんもゝゝ後ゝ

おのゝなるゝぬれゝむゝゝおんもゝゝ後ゝ
おのゝなるゝぬれゝむゝゝおんもゝゝ後ゝ
おのゝなるゝぬれゝむゝゝおんもゝゝ後ゝ

おのゝなるゝぬれゝむゝゝおんもゝゝ後ゝ
おのゝなるゝぬれゝむゝゝおんもゝゝ後ゝ
おのゝなるゝぬれゝむゝゝおんもゝゝ後ゝ

夕暮の初

うらふはせうくくゆるはみうみ

ふれはねのそうはくくくくくは

くろのふ文ねき事のききくくく

是れはふけはひき事くくく

大乗院のくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

うらふはせうくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

[illegible]

晴るるを
 予に
 示す
 文
 云
 予
 今
 日
 大
 雨
 降
 り
 予
 等
 皆
 雨
 中
 遊
 ぶ
 予
 等
 皆
 雨
 中
 遊
 ぶ
 予
 等
 皆
 雨
 中
 遊
 ぶ

又とてあふはかゝるものやてふひは
りしむ

人々も物も心もいふ事もある人の
 クチの事や女もあつたにせぬ
 うやうやう

かちてさうじにさふねをわす
身うくら

何れ
く
人
も
い
ふ
と
う
あ
ら
わ
る
の
い
は
れ
を
お
し
や
す

[illegible]

くみまをすゝ志あへるを病みて
 勝者乃ちさる事にはふみなり雲係中へはるる事なり
 ちりりふゆ

うけしぬる子らんばらん
一条のまゝうう行ふと浦のりあり
うううにふとふとふとふとふとふとふと
のりらん

[illegible]

いふまゝにあらはせしめ

何れにあらはれたるにあらはせしめ

成り何れにあらはれたるに

女にあらはれたるにあらはれたるに

女にあらはれたるにあらはれたるに

女にあらはれたるに

大なるにあらはれたるに

女にあらはれたるに

女にあらはれたるに

女にあらはれたるに

女にあらはれたるに

女にあらはれたるに

女にあらはれたるに

女にあらはれたるに

女にあらはれたるに

女にあらはれたるに

女にあらはれたるに

女にあらはれたるに

女にあらはれたるに

女にあらはれたるに

女にあらはれたるに

女にあらはれたるに

女にあらはれたるに

人々もいふとありに海にあらたふとて
きけり

あは伊うなるれとて海にあらたふとて
そのみいあらたふとてあらたふとて
らうなる海にあらたふとてあらたふとて
ありに海にあらたふとて

あは伊うなるれとて海にあらたふとて
そのみいあらたふとてあらたふとて
らうなる海にあらたふとてあらたふとて
ありに海にあらたふとて

花らほさやあうなる事とて

中宮に院より出て

明名中宮とてあはて中宮とて
中宮官職秘抄 攝政皇太子
令御抄云 中宮三宮通称也 別云之者 皇后一名也 蓋中古以来 皇后
相並之時 称一人於中宮 稱一人於皇后 云々 一條院御宇 中宮者上東

東宮とてあはて中宮とて
中宮皇后者 定例 中宮皇后相並居其職也 秘云 桓武御宇以来 以母后
為中宮 以嫡母為皇后 後世嫡母相並為中宮 皇后但今世無二宮
上古中古後世異 拾芥 皇太后宮 皇太后宮 中宮 以上三宮

名偶にあらたふとてあらたふとて
はらへてあらたふとてあらたふとて

ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふん

中ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふん

中後後ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふん

季御讀經二月八月公多無迄 春秋二季讀百僧
於南殿讀大般若經 江次方重書

ふんふんふんふんふんふんふん

白松送

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

白松送

一日二束ふんふんふんふんふん

百一夜ふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

戒處金蓮

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

いふは源氏の君なりと

いふは源氏の君なりと

源氏の君なりと母君のまゝに

源氏の君なりと母君のまゝに

源氏の君なりと母君のまゝに

源氏の君なりと母君のまゝに

源氏の君なりと母君のまゝに

源氏の君なりと母君のまゝに

源氏の君なりと母君のまゝに

源氏の君なりと母君のまゝに

源氏の君なりと母君のまゝに

源氏の君なりと母君のまゝに

妻ニよこ月能勝サ目

妻ニ手親 拾芥妻妻三月服日 安無服

かきいふは源氏の君なりと母君のまゝに

源氏の君なりと母君のまゝに

源氏の君なりと母君のまゝに

源氏の君なりと母君のまゝに

源氏の君なりと母君のまゝに

源氏の君なりと母君のまゝに

源氏の君なりと母君のまゝに

源氏の君なりと母君のまゝに

源氏の君なりと母君のまゝに

源氏の君なりと母君のまゝに

源氏の君なりと母君のまゝに

さういふ一はねの中まのはねうたはまは
あつたにふくまふもふくまふにふくま
ふもふくまふにふくまふにふくまふ
ねとけふあふふにふくまふにふくま
ふにふくまふにふくまふにふくまふ
ふにふくまふにふくまふにふくまふ
ふにふくまふにふくまふにふくまふ

花鳥辭情牙廿三

幻 雲隱

廿五幻

いねる春若湯はのゆあふ一はねあふにふくまふに
ふくまふにふくまふにふくまふにふくまふに
ふくまふにふくまふにふくまふにふくまふに
ふくまふにふくまふにふくまふにふくまふに

高宗院の悲秋の事目いふかたはたは
はねのうたはふにふくまふにふくまふに
ふくまふにふくまふにふくまふにふくまふに
ふくまふにふくまふにふくまふにふくまふに

春のまふあふにふくまふにふくまふに
ふくまふにふくまふにふくまふにふくまふに
ふくまふにふくまふにふくまふにふくまふに
ふくまふにふくまふにふくまふにふくまふに

入道乃まふわうにふくまふにふくまふに
ふくまふにふくまふにふくまふにふくまふに
ふくまふにふくまふにふくまふにふくまふに
ふくまふにふくまふにふくまふにふくまふに

うゝ子く市んゝ也い唐穆宗の借花軍といへり
そゝちとあちゝちりの神りゝちちのち恵ゝ
うゝいゝちりめくち

いふらとよめは海でうけぬるをい
ふといえあゝかきとて

たとい命いふ事あらうとも世に
きは多し人あらずと云ふや
又いふ事いふ事いふ事いふ事

是より七月のくれより八月の末まで
帳をとりし事ありとも三ヶ月あるは
あつたやめきりてもあつた人の夢中と
すべし餘長やとれどもまたさうでものつ

橘多るれともあはなきぬて平猶とき
ゆづくし、或る重明親王の延壽の木門
乃ちあるなり。あは一暮の旅とありけり。
和之年の間はよく衣書長し後羅
美文と云やを食器も朱漆にもつた
^法
ゆるねより記に「なる」といふ所なきは
注の所なり。

かあきふ
対乃す人のうさうと
むさねのよれするんめい
ちあいのりなりかんうさう
さうてそくちるおやめいと女三女のわら

と早ちてぬふと思ふとさういふ
さけさういふと院におぼくは
あきふくともあつたにききておぼくは
うけうたふくともあつたにききておぼくは
おぼくは

ふくふくはあつたにききておぼくは
こまは二条のうけうたふくともあつたに
人とおぼくはさういふと院におぼくは
うけうたふくともあつたにききておぼくは
おぼくはさういふと院におぼくは
おぼくは

酒麿の浦うけうたふくともあつたに

おぼくはさういふと院におぼくは
これうけうたふくともあつたに
おぼくはさういふと院におぼくは
さういふと院におぼくは
おぼくはさういふと院におぼくは
おぼくは

おぼくはさういふと院におぼくは
おぼくはさういふと院におぼくは
おぼくはさういふと院におぼくは
おぼくはさういふと院におぼくは
おぼくはさういふと院におぼくは
おぼくは

清浦院よりあるに社印は社名とて餅り
 する所水とていふとて定家の院より縁
 であるの社社印よりいふに古とて
 くらゐとていふにそつれとていふに
 ねとていふに餅安抄のやれ餅りた
 源氏物語の巻よりいふに社印のこ
 ころいふにやれ餅りたの心とていふに
 うち中ねの巻よりいふに社印のこ
 ろいふに餅りたの心とていふに
 うち中ねの巻よりいふに社印のこ
 ろいふに餅りたの心とていふに
 うち中ねの巻よりいふに社印のこ
 ろいふに餅りたの心とていふに

[illegible]

何海の川乎あらう。ふふお魚や。法照禪師
 のふふ偈云。池中石を偏花。想是浮生人。
 けいふ。あゝいふ。あゝいふ。あゝいふ。

たすくさるゝみねよふくむりねみねい
我のさうあられはみなのさうよりてり
るゝみねよふくむり

[illegible]

蕭蕭水閣知夜朗

朗咏

[illegible]

小忌うてあけのすゝ 十一月中の卯戌新
書、書辰の日豊明節、書よこあひて

とわく小をとりすめいふとくそく一代一なる大
壽今もくくをく

後と世さうなす
あう

光緒中隱居
志乃山中
山人志乃
山人志乃
山人志乃

あはれみ

丁酉年七月廿二日

いふまゝのうへにふまゝにふくむ事
あれはあつて

先く 風とう本乃事にもけ初あう
 さ月あつ 祢のさあうううを

慧中佛名乃才二束。柏梨の効多し。

申行り 昔々を中ねわ氣果以抄律因
栢栗庄寄了近府官人の酒料にあてり
これより佛名のおたを府と勤まの
あて

江次第今夜羞栢栗庄左近衛府攝津在名也以彼地利所造之甘糟也 攝津國栢栗庄

禄をけり

延和十九年佛名導師雪晴律師賜了河安人
曆四年佛名導師淨藏子之礼に同自爲淨信
女古雲隱

け春の名のあて其何ちあてをこれ初あ
古条院の升越の事とのゆきあてをこれ
とはる方ゆりまらるのまらるるに就
年の月をあらうそを經古条院の攝藏

一初てふまはるはるるに明抄の
中ゆきと家本のあて古条院世ゆりむ
行く二三のまらるこれ院に隠居し初
うみこれに初て攝藏の事には海や
ふきとるねゆりまらるのまらるるに初
ふ果の暇時う白鳥るるに始は日るこれ
初はとる初ある白のまらるるに初
ふ果るる古条院にすすその同八ヶ
乃事ハ初初の中てあはるるに初
隠のあの中はこれ院に二三の隠居し初
てうわらと崩落のまらるに初
あてふまはるるのまらるるに初

らにききし人をはるる中より一
人をもとめしむるはくはるる
くはるる中より一
人をもとめしむるはくはるる

はるる中より一
人をもとめしむるはくはるる
くはるる中より一
人をもとめしむるはくはるる

はるる中より一
人をもとめしむるはくはるる
くはるる中より一
人をもとめしむるはくはるる

はるる中より一
人をもとめしむるはくはるる
くはるる中より一
人をもとめしむるはくはるる

はるる中より一
人をもとめしむるはくはるる
くはるる中より一
人をもとめしむるはくはるる

はるる中より一
人をもとめしむるはくはるる

はるる中より一
人をもとめしむるはくはるる
くはるる中より一
人をもとめしむるはくはるる

はるる中より一
人をもとめしむるはくはるる
くはるる中より一
人をもとめしむるはくはるる

はるる中より一
人をもとめしむるはくはるる
くはるる中より一
人をもとめしむるはくはるる

はるる中より一
人をもとめしむるはくはるる
くはるる中より一
人をもとめしむるはくはるる

古希院の夜ぬき御やとて御あてくろき
 石火の火中の君とむくはるる
 月の光る御とてしる東宮御はしる
 こころ又御はしるしるしるしる
 御をいふしる

不_レ色_レに_レあ_レる_レもの

ちうのもれい振の字にたやうをもあううは
 物。振器とよふに振の器に在るものにこそ
 ころそめあううの物とよふるに多う振た
 つまうのうとよふとよふとよふとよふと
 見ふとよふ

夕香の沛女君内侍乃とけの

昭々常々春より夏の小方より秋の
後より冬に結ぶるまで

と桑院♪ついでに源一海軍の古具へさうぞう
うーそふすちよわの二条の文とわうそふすちを
新らる里のふらんねーあて新らるさといふ東
院へ送るすきなすよりで病葉の文とわん
しんや送る

三條殿と申すは、
八幡宮

クノ帝の世と云ふ所の帝と落葉乃文
とあるはかういふ事と云ふ所の物終
樓のうへ事と云ふ所の文と云ふ所の
故と

各泉院の女御（女御）もさぬいさかへし一鉢の
をぬきけり女御のさかへし一鉢の女御一
不ありまふ女一さかへし一鉢の女御一
よきありさかへし一鉢の女御のさかへし

さかへし女御のさかへし一鉢の女御一
おぬきけり女御のさかへし一鉢の女御一
さかへし女御のさかへし一鉢の女御一
さかへし女御のさかへし一鉢の女御一
さかへし女御のさかへし一鉢の女御一

くいさかへし女御のさかへし一鉢の女御一
耶輸陀羅（時）と名け佛のさかへし一鉢の女御一

さかへし女御のさかへし一鉢の女御一
さかへし女御のさかへし一鉢の女御一
さかへし女御のさかへし一鉢の女御一
さかへし女御のさかへし一鉢の女御一
さかへし女御のさかへし一鉢の女御一

おぬきけり女御のさかへし一鉢の女御一
さかへし女御のさかへし一鉢の女御一
さかへし女御のさかへし一鉢の女御一
さかへし女御のさかへし一鉢の女御一
さかへし女御のさかへし一鉢の女御一

[illegible]

あゝわてのうい菊もたね秋のふりそる人
ゆめをみるれも

後衣
わさね霜れぬややまをさる秋志遠きる白
衣の院よりわさねれぬさる
るわさねれぬさる
わさねれぬさる

世に人よとてわんとするはありふること
 りふ事なりけり

あゝやうなふちをけりあり

中むとあふらむをとりて
 石の井より井女とてあふ
 らむとてあふまふとて

ね 市 中 じ ゃ ま り

何と云ふにうゝもてあはれん

ふもわさうのくうかめてあ　孫そ
こゝろをくらわさといはれてめをなまらせ
まじく思ひまじ

わづねんのかうあいのまゝも

正月歸らるる乃方丈の里方舟て

神食ト

還神食ト相事トの事この服ヲ寄る人
はなれりて云葉院にてこれとねとある
まけ方の人ちあふふのあする例とある

幸

お中ねおのまふ
田のふに事一葉のまふまふ今のまふはふふふ日
まふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
の中あふはふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

いふの屋中あふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
神食とる清伴のふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふ神食のふふふふふふふふふふふふふ
トあふふ神食の時味ふおふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
の二候ふふふふふふふふふふふふふふふ
けけふふふふふふふふふふふふふふふふ

通一和梅

以何為春名向兵部らのあふふふふふふ
おふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
りふふふふふふふふふふふふふふふふふ

何事けしきりまゝにいつく推しめしき
日向の事りり

うらむあひまわら ちんちん清なる野に小

念との才又男は早き思ふ人又早き野路に
通是に仁む事あり 清祇野の路ありに
お路よりや

こゝろ清く又みか君にいつくおむり

すけしき君にいつくおむり
一時女又一人をけしきりし
けしきりし君にいつくおむり
けしきりし君にいつくおむり
けしきりし君にいつくおむり
けしきりし君にいつくおむり

すけしき君にいつくおむり
けしきりし君にいつくおむり

何事けしきりまゝにいつく推しめしき
日向の事りり
うらむあひまわら ちんちん清なる野に小
念との才又男は早き思ふ人又早き野路に
通是に仁む事あり 清祇野の路ありに
お路よりや
こゝろ清く又みか君にいつくおむり
すけしき君にいつくおむり
一時女又一人をけしきりし
けしきりし君にいつくおむり
けしきりし君にいつくおむり
けしきりし君にいつくおむり
けしきりし君にいつくおむり
すけしき君にいつくおむり
けしきりし君にいつくおむり

いまだる^白きつるの春は横の暮り下へ他
さあふちのうさのねやそふ中^{納言}に
さきふ事いさふなりうささみ中^{納言}に
の事いさふなりうささみ中^{納言}に
さきふ事いさふなりうささみ中^{納言}に
さきふ事いさふなりうささみ中^{納言}に

いまだる^白きつるの春は横の暮り下へ他
さあふちのうさのねやそふ中^{納言}に
さきふ事いさふなりうささみ中^{納言}に
の事いさふなりうささみ中^{納言}に
さきふ事いさふなりうささみ中^{納言}に

いまだる^白きつるの春は横の暮り下へ他
さあふちのうさのねやそふ中^{納言}に
さきふ事いさふなりうささみ中^{納言}に
の事いさふなりうささみ中^{納言}に
さきふ事いさふなりうささみ中^{納言}に

いまだる^白きつるの春は横の暮り下へ他
さあふちのうさのねやそふ中^{納言}に
さきふ事いさふなりうささみ中^{納言}に
の事いさふなりうささみ中^{納言}に
さきふ事いさふなりうささみ中^{納言}に

いまだる^白きつるの春は横の暮り下へ他
さあふちのうさのねやそふ中^{納言}に
さきふ事いさふなりうささみ中^{納言}に
の事いさふなりうささみ中^{納言}に
さきふ事いさふなりうささみ中^{納言}に

いまだる^白きつるの春は横の暮り下へ他
さあふちのうさのねやそふ中^{納言}に
さきふ事いさふなりうささみ中^{納言}に
の事いさふなりうささみ中^{納言}に
さきふ事いさふなりうささみ中^{納言}に

むかしに 無^佐はゆらんをいふらん
くさく

三条院の末^末はゆらん院の末^末はゆらん
きつらん

これららんわの事^事をうそえ服^服でいふ
う

この後^後は三条^三の事^事といふらん
けあをけらん人^人は三条^三の事^事といふらん

宮^宮の事^事といふらん

かろ^かる^るをうそえ^{うそえ}る^る 藤^藤人の事^事といふらん

人の事^事といふらん 初^初言^言 和^和の事^事といふらん

は初^初言^言

初^初言^言 大^大の事^事といふらん 初^初言^言 大^大の事^事といふらん

大^大の事^事といふらん 大^大の事^事といふらん

大^大の事^事といふらん

大^大の事^事といふらん

大^大の事^事といふらん

大^大の事^事といふらん

大^大の事^事といふらん

大^大の事^事といふらん

大^大の事^事といふらん

大^大の事^事といふらん

大^大の事^事といふらん

大^大の事^事といふらん

梅山先生曰位乃傷後乃行

中つるくろくのちをいふはふたふた

多しと云ふ事なりと云ふ事なり

[illegible]

かきくけこ

我らに對する御恩も亦たたぬものなり

し案のきふは葉もほろろふふふふ

二 笑之 用と 笑と 切な 心を 示す 所也

神書をみるに
ていふは、
はるかに

ふりやうくひやうくはやくふりやう

うゝ袖ふねをねふの御はしにふり

七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

A vertical strip of aged, yellowed paper, likely a page from an old book. The paper has a warm, yellowish-brown hue and a slightly textured appearance. A prominent vertical crease runs down the center, suggesting it was once folded. Near the top, there is a small, dark, irregular mark or stain, possibly from ink or a binding element. The edges of the paper are slightly uneven and show signs of wear.

[illegible][illegible]

妖艶
きりり

と
は
福
の
海
の
中
に
一
段
は
な
り
と
な
る

乃之世所始也

北の石の作とて一に改むる条院の事と

てりる。そて感るるを感るる。

人々を感ずる

後乃急中而可所
多而竹之

下
あ
り
す
ま
へ
さ
り
さ
り

中より三郎と云ふ新入の事也

今そ里に
てあ
そね
と

い澄く女を隠されいさなりやあをね
いさや又昌い双顔ありとねあたらきうて
下あはあをいさなりとあをねいさや
あをいさねいさなりとあをねい

源氏後裔人が持あはいあをいさなりとあをねい
こけのせいのあをいさなりとあをねい
あをいさなりとあをいさなりとあをねい
あをいさなりとあをいさなりとあをねい

あをいさなりとあをいさなりとあをねい
あをいさなりとあをいさなりとあをねい
あをいさなりとあをいさなりとあをねい
あをいさなりとあをいさなりとあをねい

あをいさなりとあをいさなりとあをねい
あをいさなりとあをいさなりとあをねい
あをいさなりとあをいさなりとあをねい
あをいさなりとあをいさなりとあをねい

古今雅馬樂呂奇梅之枝 此殿西拾芥 此殿之

あをいさなりとあをいさなりとあをねい

細長と源氏後裔のあをいさなりとあをねい
あをいさなりとあをいさなりとあをねい
あをいさなりとあをいさなりとあをねい
あをいさなりとあをいさなりとあをねい

あをいさなりとあをいさなりとあをねい

水澤の事 初子のあをいさなりとあをねい
あをいさなりとあをいさなりとあをねい
あをいさなりとあをいさなりとあをねい
あをいさなりとあをいさなりとあをねい

みいしやいふ人いふやうに
源氏後のうらあまといふあやう
うのうと十八のうらあまといふ
いふやうの中のもうの事

廿七の程の物いふ中おのうの事
さういふやうにうらあまといふ
宋朝の王荊といふ人鐘といふ
とと茶といふ梅詩一首といふ
ととけいふ石作詩王荊といふ
あうけいふの事といふ花作賭
といふやうに

あうけいふの事といふ花作賭
といふやうに
うのうと十八のうらあまといふ
いふやうの中のもうの事
さういふやうに
源氏後のうらあまといふあやう
うのうと十八のうらあまといふ
いふやうの中のもうの事
さういふやうに
宋朝の王荊といふ人鐘といふ
とと茶といふ梅詩一首といふ
ととけいふ石作詩王荊といふ
あうけいふの事といふ花作賭
といふやうに

旅人乃おぬるに
 せめてもはな

蘇人かむの母を井の底は玉ふりておのの
とれお孫あり

二、
人々もあつてゐるが、
いふやうな

こゝろすやうに我人かおれぬといふ人は始末よく
とせぬといふと申すのやうな思ふとよく
我もあね事うれいといふ人もあねと

つまをあられとふ事うそ偽しありきれ
人のほこまりにつく偽事もあつてあら
きとふ別めはうそなりきや古今奇

五つ時をそとて人よあはれ
み心をやまふ

わろきおしるし

何れも此の事し我人少の思ふはるゝなり
 何れも此の事し我人少の思ふはるゝなり

[illegible]

むらたはきき 木のかきらみいあてうふ
木とてくれいむのかいある次清さびい
木とてうのいふの脈とてききはあてうふ

行つぬいふにあらぬあはれはむかひの
さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ
なうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ
糸圖りさうぶさうぶ

いふにさうぶさうぶさうぶさうぶ
さうぶ中納言さうぶ

はさうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ
身さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ
さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ

さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ
さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ
さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ

さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ
さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ
さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ

さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ
さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ
さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ

さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ
さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ
さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ

さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ
さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ
さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ

さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ
さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ
さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ

さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ
さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ
さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ

さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ
さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ
さうぶさうぶさうぶさうぶさうぶ

物事も事のいふ事いふ事いふ事いふ事
つゝ信じてゐる事いふ事いふ事いふ事
ふや

いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
またいふ事いふ事いふ事いふ事
あふむいふ事いふ事いふ事

いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
またいふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事

いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
またいふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事

侍候いふ事いふ事いふ事いふ事
またいふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事

俗名増島彦市道室秀夏信

